見えるものであるが、しかし事實に於いては、もしひとが精確に眺めるならば、何らかの他の種の・そして異つた傾向の力がすでに最初からそれの中に、それと相並んで、またそれの下に跡づけられることが出來、そして此のものが前者を越えてより遠き未來を望見し、……何時かはそれと交代すべく運命づけられてゐる——と云ふやうな場合が稀ではない」「十八世紀は、一つの新しい精神力が一定の間外見上は絶對的に勝利を得てはゐるが、しかしその凱旋の當初からすでに一つの對立的な傾向がそれに隨伴して居り、そして此れが後になつて前者と交代すると云ふやうな經過の最大の實例の一つである。啓蒙及び合理主義の世紀は、決して唯單にかゝるものゝみであるのではなくして、むしろ十九世紀に於いて、ロマンティクとして・非合理主義及び歴史主義として發芽すべき萠芽をば、すでに最初からその胎内に宿してゐたのである」(S. 250)

「然し、かゝる兩極性は、唯單に大體としてのヨーロッパ精神生活の發達を規定するのみならず、むしろまた個々の民族の生活をばそれ自身のうちに於いて規定するものである。各々の民族はその性格の兩極性、即ち相對立せる諸傾向をば自らのうちに包藏してゐるものである」。例へば、「宗教戰爭の時代に對する反擊を導き入れたところのあの啓蒙精神が、ロック、ヒューム、その他の人々を通じて Empirismus 及び Sensualismus の形態をとつたと云ふことは、純粹に英國的であつた。併しまた、英國の Nationalcharakter たる "Common sense" に對する對極が、——即ち吾々は之を全然概括的に且つ皮相的に romantisch-ästhetisches Bedürfnis と名づけたいのであるが、そのやうな一つの Etwas が——啓蒙精神の凱歌の下に於いて、唯單に死滅しなかつたのみならず、むしろ半ば目覺めつゝ生き永らへ、そして徐々に再び自己の正當な權利を主張することが出來た、と云ふこともまたひとしく純粹に英國的であつた。十八世紀の初頭、即ち尙英國の啓蒙の最盛期以前に於いてすら、此の種の最初の大なる感情が Shaftesbury に於いて示されたのである」。

——いま吾々がこゝで此の論文の詳細を具體的に逐次的に紹介し得る紙幅を有しないことは遺憾であるが——とも角、此の樣な立場に立つて、彼はその前半に於いて先づ十八世紀英國の一般的な思想傾向をば殆んどすべての部門にわたつて論じつゝ、續いてその後半に於いて、Edmund Burke の思想をあらゆる角度から檢討してゐるのである。そして最後に Burke の歴史思想を「歴史主義の觀點から見る」ことを以て、此の論文を終つてゐる。

〔中山〕

○Henri Pirenne と Henri Sée 兩教授の訃

最近西歐の社會經濟史學界は相次いで二人の權威を失つた。一人はベルギーの H. Pirenne、他はフランスの H. Sée である。兩氏とも自國に於ける泰斗であるのみでなく、國際的にも亦知名の碩學であつた。此處に兩氏の業績を簡單に紹介して以つて追悼の微意を表したい。

Henri Pirenne (1862$^{12}/_{23}$—1935$^{10}/_{24}$) 教授の著作目錄は、教授

の Ghent 大學就任四十年記念の Mélanges d'histoire (1926) の中に掲載せられてゐる。「歴史の研究には終局がなく、歴史家は道を開いて行くが、それを閉して行くものではない」との信念のもとに、教授の研究の大半は、浩翰な名著「ベルギー史」(Histoire de Belgique) 七卷のために捧げられた。一九〇〇年その第一卷が出版せられるまでの、中世都市起源に關する數多くの研究は各れもこの「ベルギー史」の準備であり、基礎をなすものである。勿論、彼の商人自治體起源説に對して幾多の批判が存するにしろこれらの論文の中にそれ自體、中世自治都市研究上忘却され得ざるものも少くない。彼の晩年の研究が再び此の方面に向つたのを考へ併せる時、より一層注目せられる。世界大戰により一大衝擊を蒙つたにも拘らず不撓不屈の教授の努力は「ベルギー史」第二卷以下を相次いで出し、一九三二年その第七卷を以つて完成を見た。その間發表せられた幾多の論作もすべて此處に要約せられて居り、實に此の「ベルギー史七卷」こそ、教授の名を不朽たらしめる傑作であり史學史上の一大金字塔である。晩年の研究に於ては、所謂古代・中世連續の問題に關係して、Princeton 大學での講演 Medieval Cities, their Origins and the Revival Trade. (1925) が最も注目せられてゐる。

この優れた研究の一方、教授は又國際的活動に携はり、國際歴史學會議にもその勞を惜しまず、一九二八年のオスローの同會議には、獨・墺兩國が理事に任ぜられたのも、教授の美しき國際愛に負ふ所があると云はれ、又教授は他國の叢書等に寄稿するなど、國際的に活躍した。多くの名譽ある地位が彼に與へられたのも當然であらう。斯くて Pirenne は單に學者としてのみでなく、優れた教授として大なる感化を及ぼし、幾多の門下の俊才によつて、その研究は繼承せられ發展せしめられてゐるのである。

(English Historical Review. no. 201, 1936. Powicke 氏の論文參照)

○Henri Sée (1864^{9}/—1936^{3}/$_{16}$), Pirenne 教授がその生涯の過半を Ghent 大學で送つたに似て Sée 教授も巴里附近に生れ Sorbonne で學を卒へるや一八九三年來 Bretagne の Renne で教授に就任し、同大學の名譽教授として、本年三月他界するまで約四十年間 Renne 大學で研究に終始し、その間著を出すこと二十有餘、多數の雜誌論文を發表しフランス社會經濟史學界に貢獻する所著るしく、現代斯學の一大權威と認められてゐた。教授の Bibliographie はいづれ發表せられるであらうが、ここではその主著のみを紹介するに止める。

教授の研究は多岐多方面に渉つてゐる。初期には農村・農民に關するものが多く、中でも Esquisse d'une histoire du régime agraire en Europe aux XVIIIe et XIXe siècle.(1920) は「十八世紀及十九世紀の歐洲に於ける土地所有、農制、農民の狀態の(第一部)及び十八世紀末、十九世紀初の農民解放の(第二部)諸類型を比較史(histoire comparée) の本質的な線に沿ひて跡づけんと試み」たもので、「エルベ河以東と以西との對照」を强調してゐる。農民、農村の研究より進んで廣く社會經濟史に及び La vie économique et

les classes sociales en France au XVIIIe siècle (1924) では、所謂舊制末期のフランスの農業資本主義化の運動(第一部)と經濟的事象の社會的階級變化への影響」を考察し、L'évolution commerciale et industrielle de la France sous l'ancien régime (1925) では、「從來の舊制末期の商工業に關する特殊研究を綜合せんと試み」、La France économique et sociale au XVIIIe siècle. (1925) なる小册子では、大革命前の農民・貴族・僧侶・大小ブルジョワージの社會・經濟史的な究明を非常に平易に明晰になし、同種の叢書の Les origines du capitalisme moderne(1926)では、西歐の近世資本主義の起源より十九世紀に至るまでを諸家の研究を比較・綜合し、又 Esquisse d'une histoire economique et sociale de la France depuis les origines jusqu'a la guerre mondiale (1929) は、從來の自己の研究の結果、他の特殊的研究等を綜合して、恐らくフランスで最も纒つた社會經濟史と考へられてゐる。尙獨逸語で出版されたFranzösische Wirtschaftsgeschichte 2 Bde. (1930—1935) も同樣のものと思はれる。

教授の研究は更に政治思想史・史學理論にまで及んで居り、「十七・十八世紀のフランスの政治思想」に關するもの、又、唯物史觀、歷史哲學等に對する見解も二、三の著書として刊行せられてゐる。これらの著述の外、或は A. Young の旅行記の完譯や、最近では叢書 Clio にも盡力(本誌前號參照)するなど、或は根本史料の刊行に與る等、Revue historique, Annales d'histoire économique et sociale その他への無數の論文と共に、フランス史學界に甚大の寄與をなしたのである。而も、これらの研究が、晩年十數年間のもの多きを思へば、我々は教授の撓まざる研究心に敬服せざるを得ない。

その歷史理論・比較方法等には幾多の批判の餘地があるにしろ、教授の明晰な、流麗な文章は、豐富な參考書誌と共に、フランス經濟史を研究するものに、非常な親しみを感じさせる。事實教授は各地よりの訪問者を歡待し、特に若き人々の教導に努力を惜しまなかつたと云はれてゐる。遠き見知らぬ異邦の一學徒の問に對してゞも懇切に返答を賜つた教授にこの一文を弔辭として捧ぐることを許して頂きたい。〔前川〕

○經濟地理學要義

田中秀作
田中博共著

輓近我國經濟界の發展は經濟地理的知識の必要を喚起し、經濟地理に關する論文、著書の公にされるもの應接に暇なき程である。雜誌「地理と經濟」又經濟地理學叢書の如きは到る處の書店に陳列されてゐる。それ等を瞥見すると執筆者は專門の經濟學者、地理學者よりも寧ろ個々の產業部門の技術者、實際家が多く、經濟地理學が甚だ若く活氣に充てる學問である事を感ずるが、又之等の中には單に流行に從つて何々地理と稱するだけで、內容は統計を羅列したに留まつて眞の經濟地理學には尙遠いものである事を遺憾に思ふ。この時に當つて、本學出身の地理學者にして長らく彥根高商、神戸高商に於て經濟地理學を研究教授され來つた兩學士